

## 序章 浴する文学

### 1 海水浴と温泉

文学と温泉の相互関係をめぐる私の研究の淵源は、アラン・コルバンの『浜辺の誕生——海と人間』の系譜学』（原著一九八二年、福井和美訳一九九二年）を邦訳されて間もなく読み、非常に触発されたことに遡る。古代ギリシア・ローマにおいて海辺は危険な場所であり、汚穢のたまる嫌悪すべき場所だった。このネガティブな評価は、中世以降『聖書』が説く恐ろしい大洪水のイメージと融合しながら、十八世紀まで優勢だった。けれども、一七五〇年頃から医者たちが「当時流行の最先端にあった温泉場をモデルにしながら考えをめぐらせ」（福井訳、一五六ページ）、海水浴、海岸の空気・眺望・散策などが体力増強に良く、腺病質、憂鬱症、ヒステリー、結核、不妊症、痛風などに対して治療効果があると主張し出した。かくして一八四〇年代初頭までに、ハイソサエティーの人士が各地の

海岸に殺到し、浜辺リゾートが形成され、海や浜辺の価値が大きくプラスに転じたという。価値転換の発祥地はイギリスであり、温泉都市バースと海浜都市ブライトンがそれを象徴する。

海岸保養を考えるうえでも、やはりイギリス人の創意工夫が鍵を握っている。浜辺リゾートの創出にあたっては、イギリス内陸部の「湯治場」を背景にした温泉保養がモデルとして絶大な影響を及ぼした。いろいろな特徴から見て、ブライトンの海水浴場はバースの「湯治場」の変種ともいえる。どちらの場合でも遊びよりは治療という目的が優先されている。バースもブライトンも保養という流行現象からあいついで有利な波及効果を受けとった。流行に先鞭をつけたのは、六月から九月にかけてのこのふたつの保養地にいりびたる貴族階級や「ジェントリー」であった。社交生活を盛りたてるには、イギリスの田舎にある大邸宅を使うのが好ましい。だが貴族階級や「ジェントリー」は、そんな場所で社交を催すよりも、ニースやバースやブライトンに逗留したほうが一般的に安くつくということに気づく。

(同、四八八ページ)

療養で温泉場に長期滞在する支配階級ないし有閑階級のため、入浴施設や豪華なホテルだけでなく、遊歩道、別荘、劇場やその他ホール、カジノ、名所遠足コースなどが整えられ、やがてそうした近代的温泉リゾートをモデルとしたリゾートが、海辺にも転移していった。当初は治療がリゾートへ旅行する主目的だったが、しだいに社交、見栄、気晴らしを主目的とする滞在者が増えていった。

ブライトンでの気晴らしや一日の生活リズムは、バスやタンブリッジ・ウエルズに通いながらいるひとはすでにおなじみのものだ。内陸の保養地とおなじく、海辺の保養地にも水浴施設や本屋兼読書室が数々とのついでに。ひなびた保養地でさえ巡回図書館を備えている。どの「湯治場」にも散歩道が縦横に走っており、よりどりみどりの遊覧旅行コースが用意してある。保養客はケルトの遺蹟を見学したり、さまざまな見晴らしを楽しむことができる。海のとおりともなれば、加えて小舟を使った水上遊覧もあるし、なによりもヨットセーリングがある。ヨットセーリングは海辺の保養地が流行に乗ると軌を一にしてブームを呼ぶ。舞踏会場、談話サロン、遊戯室に出かければ、すてきな晩を過ごすこともできる。ブライトンではカッスル・ホテルとオールド・シップが客の人気を二分していた。一七六六年、カッスル・ホテルがダンス室を備える。つぎの年、こんどはオールド・シップがダンス・ホール、ランプ遊戯室、コンサート会場を一体化した、一大社交場を設ける。

(同、四八九ページ)

海水浴が西欧近代の発明だったことや、海水浴場のモデルが温泉場だったこと、海水に身を浸す行為が湯治に匹敵するような療法であり、医者によって細かくコード化されていたことなどを、私は『浜辺の誕生』を通じてはじめて知った。コルバンの大著の主題はあくまでも「浜辺」の文化史なので、温泉に関しては十八世紀のイギリスの温泉ブームが紹介されるにとどまっており、西洋温泉文化史としてはなだ不十分といえる。けれども、私はそれまで海水浴と温泉浴を比較したことすらなかったので、新鮮な驚きを覚えた。

それ以上に刺戟的だったのは、「感性の歴史」の提唱者であるコルバンが、海水浴の形成史を「感性」ないし「欲望」の諸変動として論じていることや、一見単純な度合いの変化とみえる過程に質的变化があることの証拠として、しばしば英仏独の文学に思いがけない角度から言及していることだった。たとえば、「自然の諸力が触れあう、揺れ動く境界のきわ、空虚を囲う前浜を馬に乗ってさまざまとき、早駆けする蹄の音と碎け散る波の音とがそれぞれ独自のリズムを刻みながらも、しかし耳のなかでうまく溶けあい、いままで感じたこともない情動が馬上のひとを襲う。浜辺で馬を乗りまわすのを好んだバイロンは、このあたらしい情動の多彩な色あいを物語詩『異端者』（一八一三年）に定着させる」（同、三四七ページ）とか、「あてもなく砂浜をさまようという行動様式は一八三〇年代に突入するが早いのか、突然、急激な勢いで伝播しはじめる。この行動様式にかんずるかぎり、バルザックも、ラマルティエヌも、ミシュレも、つづいてヴィクトル・ユゴーも、そして「ブルターニュ・ロマン派」にぞくするひとびとも、『砂浜の隠遁地』の作者イポリット・ド・ラ・モルヴォネとおなじ感受性を共有している」（同、三五一ページ）と語りながら、コルバンは視覚中心の海辺の評価から体感を重んじた評価への転換を論じている。

コルバンのなアプローチが、温泉を描いた日本の近代文学に対しても有効だろうと思われた。まっさきに念頭に浮かんだのは、以前から愛読・研究してきた宮沢賢治だった。彼は数々の温泉場を控えた花巻に生き、農学校の生徒と温泉にしばしば出かけたり、花巻温泉で庭園設計を行ったりしており、童話や詩や小説に温泉場が登場する。海水浴は描いていないが、短編小説『イギリス海岸』（一九二四年頃）では、白亜のイギリスの海岸に見立てた北上川の岸辺で生徒たちと化石採集をしたり泳いだ

りする情景を生き生きと描いている。

ただし、西欧にかぎられたコルバンの見取り図をそのまま賢治文学や近代日本文学に適用することはできないということも、容易に予想された。海水浴と温泉浴の当然の差異があるだけでない。明治以降の日本の温泉は西洋の温泉医学や温泉リゾートの影響を深く被ったとはいえ、古代から近代まで衰えることなく湯治の風習が存続していた。古代ローマの温泉文化が完全に断絶しないまでも、古代ローマ帝国の崩壊、ゲルマン人の侵略、教会による温泉批判・入浴批判、ペストの流行などにより大きく衰退した期間をへている西洋とは、歴史が大きく異なる。十八世紀以降の西洋の温泉施設が概してフォーマルで、幾何学的で、画一的なのに対して、日本のそれはヴァナキュラーで、自然成長的で、多様である。裸体での共同入浴が中心となり、混浴が明治以降も存続したことは、西洋近代的な公私の基準では理解しがたい裸の社交や、覗きとは異質なエロティシズムや、温泉の温度と触感に関する洗練された嗜好をもたらした。上流階級に限らず農民や漁民が湯治をしてきたこと、江戸時代以降の現象であるが都市に銭湯が普及していたことなども顕著な差異だ。温泉や火山活動をめぐる信仰も、衰退過程にあったとはいえ、しぶとく持続していた。温泉地では、西洋的なものと日本的なもの、近代的なものと同近代的なもの、民衆的なものとエリート的なものが重畳し、混淆していた。そもそも近代に温泉旅行や温泉を扱った小説が極めて多く、そのなかに作家の代表作や文学史上の重要作品が数々存在するという点自体、西洋との顕著な差異といえよう。

かくして私は二〇〇〇年頃から宮沢賢治を温泉という角度から捉えなおす研究に取り組んだ。賢治における温泉を歴史的に位置づけるには、明治から昭和初期にかけての他の作家たちの温泉表象がど

のようなものだったのかを踏まえなくてはならないが、先行研究を参照すれば容易にすむだろうと予想した。ところがである、すぐにひどく驚き、困惑してしまった。まとまった学術的先行研究が見当たらなかったのだ。温泉というトポスが広く重要な位置を占めていることは近代日本文学の著しい特色であり、その研究が文学史的かつ国際的な意義をもつのは論理的に明らかであるにもかかわらず……まさに燈台もと暗しというべきか。

種村季弘、池内紀、川本三郎など、文学通かつ温泉通の知識人による温泉や温泉文学にかんするエッセイや紀行文なら数多くあった。伝記研究者や地元の郷土史家が、作家の温泉逗留や当時の温泉場の状況を精査した研究も少なくなかった。前者はしばしば達見や考えるヒントが含まれており、後者は事実関係を教えてくれたが、概して両者とも温泉地の歴史の確認、作品内で温泉が果たしている機能の分析、温泉表象の文学史的考察が稀薄といわざるをえなかった。日本の温泉史の方面でも、文学を資料として「感性」ないし身体感覚の問題を組み込んだ先行研究や、温泉を海水浴・銭湯・家風呂・冷水浴などと関連づけて「入浴行為」の一分野として論じた先行研究は非常に乏しかった。

けつきよく、非力ながら私は、宮沢賢治と温泉の関係に関する研究と併行して自分で少しずつ他の作家たちの温泉文学を読み、関連する温泉場の資料収集や、宿泊・入浴を含む現地調査を続けることになった。種村季弘・池内紀編『温泉百話 西の旅』（ちくま文庫、一九八八年）、同『温泉百話 東の旅』（同）、富岡幸一監修『温泉小説』（アーツアンドクラフツ、二〇〇六年）といった文学作品のアンソロジーや、浦西和彦編著『温泉文学事典』（和泉書院、二〇一六年）には、ずいぶん助けられた。二〇〇七年には川村湊による『温泉文学論』（新潮新書）が現われ、刺戟を受けた。本書はそう

した研究の暫定的なまとめにほかならない。

## 2 感性の歴史家、夏目漱石

研究を進めるにつれ、江戸時代の終わりの年に生まれた夏目漱石（金之助）が並ぶ者のない先駆者であるということも、強く感じるようになった。一九〇五年に『吾輩は猫である』で小説家デビューした漱石は、一九〇六（明治三十九）年、『坊っちゃん』『草枕』『二百十日』と立て続けに三本の画期的温泉小説を発表した。それらについては第一章で論じるので、ここではそれ以前の作品について触れておこう。漱石の最初期の作品は海水浴と温泉浴をめぐるものなのだ。

第一高等学校校本科一年生だった二十二歳の漱石は、咯血した兄夏目直矩の転地療法に付き添い、一八八九（明治二十二）年七月二十三日から八月二日まで興津（静岡県清水）に逗留した。帰宅後の八月三日、級友・正岡常規へ興津保養を勧める手紙——興津を称える長い漢詩を含む——を送った。正岡は、前年八月の鎌倉・江の島旅行中にはじめて咯血し、この年の五月ふたたび咯血して「子規」（ホトトギスの異称）と号しホトトギスの句を連作していた。漱石は、手紙を「先は炎熱の候時候御厭い可被成いずれ九月には海水にて真黒に相成りたる顔色を御覧に入べく、それまではアチュー」と結んでいるので、興津の浜で海水浴をしたと思われる<sup>①</sup>。

続く八月七日から三十日、漱石は友人四人と房総を船と徒歩で旅行し、翌月初旬、漢文紀行文『木屑録』を書き上げ、同級の正岡子規に披露した。そこには、内房の保田に宿泊して存分に行った